（別紙 2）

論文審査の結果の要旨

氏名　　倉本　尚徳

北魏・西魏・東魏・北斉・北周の５王朝が興亡した北朝期（４～６世紀）は、仏教の受容が中国社会で本格化した大変重要な時代といえる。この時期、地域社会に仏教が普及する過程で大きな役割を果たしたのが造像である。当時開鑿された雲崗石窟や龍門石窟は有名であるが、地域社会における仏教信仰という観点から見れば、義邑などと呼ばれる信仰集団によって造られ､現在も華北の各地に遺物が残る石仏像の方が一層重要と考えられる。

本論文は、中国北朝時代の造像に刻まれた銘文を中心的な資料とし、関連する正史や仏典などの伝世資料、あるいは敦煌出土の文献資料も用い、この時代の地域社会の民衆において行われた仏教の信仰や実践について具体的状況の解明を試みたものである。

本論文は、序章、第一部の三章、第二部の七章から成る。まず序章は先行研究の成果を整理しつつ本論文の立場を明確に提示する。そして本論第一部では造像と義邑の関係に焦点を当てて詳論する。第一章は基本的事項の確認として、義邑の定義問題や研究史について概観し、かつ造像銘の文章構造や造像の理論的支柱である感応思想を論ずる。第二章では、各地域で造られた尊像の相違や義邑の地域性について統計的手法を用いて詳細に考察する。第三章は、道教の影響の強い陝西地域の特殊性を分析し、当時の道仏二教の関係について論ずる。続く第二部は、造像銘の内容を分析しつつ仏教経典との関係を明らかにし、仏教思想史的観点からの考察を行う。第一章は造像銘に現れた仏名に着目し、北朝で盛行した仏名経典類との関係について論ずる。第二章は『大方等陀羅尼経』十二夢王の図像の刻まれた石刻を取り上げ、邑義（義邑の構成員）や当時の懺悔方法である方等懺との関係を論ずる。第三章は懺悔の功徳を説く中国撰述経典『大通方広経』を取り上げ、造像碑に対する影響、流布地域、『涅槃経』思想との関係を考察する。第四章は「陽阿胡県村造像記」と菩薩戒を説く中国撰述経典『菩薩瓔珞本業経』の関連を論じ、かつ地域社会の邑義の間で菩薩戒の授与儀礼が行われたことを明らかにする。第五章は『高王観世音経』の成立事情を当時の造像記等から検討する。第六章は石刻にみえる「観世音仏」という仏名をもとに、『観世音十大願経』との関係、および釈迦に続く仏としての観音の位置づけを論ずる。第七章は、北斉後半期の河北で浄土教主の仏名が「無量寿」から「阿弥陀」へと変化する事情について、造像銘の生天、往生浄土に関する用語の分析から考察する。

本論文は、造像銘を基礎資料とすることによって伝世文献では見えにくい北朝期の民衆仏教の実状を様々な面から明らかにし、従来の研究を大きく進めている。また特筆すべきは、使用した紀年造像銘資料の豊富さである。従来この分野の代表的な研究書で 1300～1600 件程度であったが、筆者が素材とした資料は 2967 件にのぼる。その中には自身の実地調査により収集した一般に未公開の資料も数多く存在し、時には精密な読解を施し、時には図表化するなどで活用されている。本論文はどちらかといえば資料読解が主体となり、扱うテーマがやや分散的になっている側面もあるが、新たな資料も駆使して示された数々の成果が中国仏教史および中国史研究において大変重要な意義をもつことより、本審査委員会は博士（文学）の学位を与えるにふさわしいと判断する。